俺だけのセンセイ

・゜+くま+゜・

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺だけのセンセイ

【Ｎコード】
Ｎ３０３９Ｅ

【作者名】
＊・゜゜＋くま＋゜゜・＊

【あらすじ】
「もっと俺の為に鳴けよ・・・・―」どうもパッとしない理科教師日向と学年の人気者龍也の秘密の関係

理科教師日向

「なぁ、龍也次理科の日向の授業だぜ？ダルいから屋上行かね？」

そう言うとその男は、机に突っ伏せている俺の後頭部にデコピンを喰らわせる

コイツの名前は永井拓未、中学から一緒でただ何となくつるんでるトモダチ

「俺パス何か気分じゃねぇ。」

「そう言うと思った。お前理科の時だけ付き合い悪いよな。」

普段はサボり魔の俺だが、必ず理科の授業だけは、ちゃんと受けていた

その理由は、最近この学校に来た男の理科教師日向にあったりする

キーンコーン
カーンコーン・・・

「え・・・えっと・・・き・・・今日は、さ・・・さっ細胞分裂についてべ・・・勉強しますっ・・・」

「プッ・・・―」

何度見ても飽きない理科教師の緊張感が解けない新鮮な反応

もうこの学校に来て２ヵ月が経とうとしているのにいっこうに馴染む気配が無い

男のくせに、まったく頼りない日向の授業を聞こうとする者は、クラスの真面目君か俺くらいだろう

「きっ・・・・教科書のにっ２３ページを開いて下さいっ・・・・」

大きなビン底眼鏡に体の大きさに合ってない妙にデカい白衣

身長は男にしてはとても小柄な方で１６０よりも少し小さめだろう、白く細く伸びた腕は黒板に力強く文字を書く

日向を見る度いつも新しい仕草や癖などが発見できて退屈しない

じっと見つめている俺の視線に気がつくといつも日向は焦って目を逸らす

俺がそんなに怖いのだろうか・・・・・・――――？？

校内でも結構有名な俺は、自慢じゃないけど女子にだって相当モテるし男友達も多い

だからと言ってそこらの不良のように悪ぶってはいないつもりだ

「あ～授業とか超ダルイんですけどォ～

てか、日向の授業なんか誰が聞くかって感じィ？マジキモイあのビン底眼鏡ウケるんですけどォ～」

チラリと後ろを振り向くといつものように女子生徒達がグループを作り雑談している

「はっ・・・羽崎さん・・・じ・・・授業中は・・・しっしし・・・私語はしないでくださいっ・・・・・」

ったく・・・・日向も馬鹿だな・・・そんな事言っても返り討ちにあうだけなのに

予想通り女子生徒達は日向に冷たい視線を浴びせ、そのまま雑談を続けようとする

「だ・・・だだ・・・からっ・・・あ・・あの・・じ・・・授業中は！！！」

「っせーな！！お前しつけーんだよ！どっか消えろよキモイのが移るじゃん！」

「・・・・・・・――――。」

クラス中に嫌な雰囲気が流れる、口を開こうとするものはまずいない

そして、俺のイライラ度もＭＡＸに達しようとしていた

「ハハハハ！固まってるよコイツ！本当キモイ何も言い返せないとか終わってる～」

・・・・・・・・・・――――

・・・・・・―ッ

「っせーな。」

「えっ・・？」

「だからうるせぇって言ってんだよ！！
ガキみてぇにギャァギャァ騒ぎやがって1人じゃ何も出来ない奴等が文句言ってねんじゃねぇよ！」

ったく・・・・・――本当俺こういう奴等嫌い。

女子生徒達は、俺が普段キレないせいか相当焦ってるのが分かる

「なッ・・・・なによ・・・ちょっとモテるからって調子乗るんじゃねーよっ・・・・・」

こいつ等が何を言ったって俺には泣き言にしか聞えない

しぶしぶ自分の席へと戻る女子生徒達を最後まで睨み付ける

「じっ・・・・じゃぁっ・・・じっ・・・じじ授業を始めますッ・・・・」

日向がずり落ちた眼鏡を直すと同時にチャイムが鳴りびく

あ～あ、今日ほとんど日向の事見れかったじゃねぇか・・・・

次はどうでもいい数学の授業だったので俺は屋上に行こうと教室を

出た

まさかの告白?!

「あ・・・あの・・・か・・・・かか・・海堂君ッ・・・・・・・・・・
ーーー!!」

んっ・・・・??

屋上へ続く階段に登ろうとした所で突然誰かに呼び止められる

あ、海堂ってのは俺の名字ね?

鉄臭い匂いが立ち込める螺旋階段の下で俺はチラリと視線だけを後ろへと向けた

「・・ーッ?!!!」

そこに立っていたのは、なんとあの理科教師日向

いつものように見知らぬ女子生徒からの告白だと勘違いしてた自分が恥ずかしくなる

「え・・・と・・か・・海堂君・・・・あの・・さ・・ささ・・さっきは・・ぁ・・・あ・・ぁりがと・・ぅ・・」

ッ・・・・・・・・／／／／／

うッ・・・日向の・・上目遣いッ・・・・・・可愛いすぎるッ・・・・／／／

普通にしてても俺と日向じゃ頭一つ分以上身長が違うのに、

段差のある今は、かなり日向が可愛く見えるポイントだったりする

ビン底眼鏡と普段は生徒に馬鹿にされている日向だがよく顔を見てみると

眼鏡の下に隠された大きな瞳に長いまつ毛男とは思えないほど綺麗な白い肌、毛穴なんてものは一つも見えない

そんな日向の可愛さに気付いているのは俺だけでいい

そう思ってしまうのは何故だろうか・・・・・??

「え・・・・あ・・・あの海堂君っ・・・・・・??」

日向の可愛さに圧倒され呆然としている俺を日向は心配そうに上目遣いのまま覗き込む

ッ・・・・なに考えてんだ日向の野郎／／／／本気でヤベぇ！！！！そんな顔近くに来たら俺ッ！！／／／／

「用件がそれだけなら、もう行くけど?」

わざと冷たい視線で日向を睨み付け、顔を背ける

冷たい態度を取らないと俺は今にでも日向を・・・・・・・・・・・ッて・・・・・男に欲情しちまうなんて、俺どうかしてるっ！！！／／／／

「か・・・かか・・海堂君・・・・まま・・・・まッ・・・・待って！！」

「ッ？！！！」

突然手を引っ張られ俺は階段の上でバランスを崩した

危ない！！日向にぶつかるッ！！！！！！

ガッシャーン！！！

・・・・・・・・・――――！！！

「ッ？！！！おい！！日向ッ？？！！！！」

日向の眼鏡が割れ、ガラスの破片が床に飛び散る

「海堂君・・・・ッ怪我はありませんか・・・・？」

「なんで、俺なんかをかばったんだよ！！！

お前の細い体じゃ俺を支える事なんて絶対無理に決まってるじゃねぇか！！！！」

日向の頬からは、ガラスの破片で切ったのか血が流れ出す

「かっ・・・・かか・・・海堂君は、ぼ・・・・僕の大切な生徒だからっ・・・」

照れくさそうに微笑む日向の姿は凄く愛らしくて、今にも抱きしめたくなる

「・・・・・ッて、なーんちゃって♪」

え・・・・・・・・――――？

「あ～あ・・・もぅ良いセンセイぶるのやーめた♪」

え・・・なッ・・・これが・・・・日向・・・・・・？？

嘘だろ・・・・・・・・・・？？

「なぁ、龍也ってさ授業中いつも俺の事見てるよな。・・・・・・・・もしかして俺の事好き？」

「ッ？！！！／／／」

「その顔は図星かぁ～なーんだやっぱり・・・・・お前結構モテるのに同性愛者だったとはなぁ・・・」

はッ？！！

俺がこの俺様が・・・・

同性愛者（ゲイ）だと？！！！！

「違うに決まってんだろ！！！！お前なんか好きでもなんでもねぇよ！！！！」

裏では俺の写真が１０００円で売られてる俺がだぞ？！！！

バレンタインの時にチョコを貰いすぎて業務用のゴミ袋を背負って帰った俺がだぞ？！！！！

そんな俺が男が好きな訳無いだろ？！！！！！

「っ・・・そうなの？た・・龍也わぁ・・・僕の事っ・・・・僕の事嫌いなのっ？」

ッ？！！！それは反則だろ！！！！

おおきな瞳にいっぱいの涙をためている日向は、そこらの女よりは１００倍も１０００倍も可愛い

「・・・・・ッ・・・・・やっぱぼ・・・・僕の事っ・・・・・嫌いなんだっ・・・・」

「ッ？！！！分かったよ！！好きって言えば良いんだろ？！！あぁ俺は日向が好きだよ！！

・・・・・これで満足かッ？！！！」

このままだと理性がぶっ飛んで、ヤバイ事しかねないので、なるべく目を合わせぬよう日向をなだめる

「今の言葉本当？」

不気味な笑みを浮かべ俺の首へと手をまわしだす日向

ッ？！！！コイツ泣き真似してやがったのか！！！！

「離せよ日向！だいちセンセーがこんな事して良いのかよ！」

下半身の違和感に気付いた俺は日向にバレては、まずいと無理矢理突き放す

「馬鹿だな龍也は、もし仮にバレても、誰が龍也の言葉を信じる？それに・・・・・これもあるしね・・・・」

そう言うと日向はポケットから携帯を取り出し二ヤリと笑う

『あぁ俺は日向が好きだよ！！』

携帯から流れる先程俺が言ったあの言葉

「これ、放送で流したら学校中の大ニュースになるよなぁ・・・・」

「日向お前ッ！！！何企んでいやがる？！！」

日向のヤロウ！可愛い顔しやがって、性格悪ッ！！！

「本当威勢が良い奴だぜ、まぁ・・・そんなところも好きなんだけどよ。」

ったく・・・・本当日向は・・・・・・・

・・・・・・――ん？

んんんんんんッ？！！！！！

今、日向・・・・・俺の事・・・・・・

「好きだよ、龍也。」

はぁあああ?!!!!!!!

俺の為にもっと鳴けよ。

「はッ・・・・おっお前今・・・・・・―」

日向の言った言葉が信じられない俺は、夢なのでは無いかと頬を抓る

「もぉ～何回言わせるんだよ！だーから、俺は龍也がスキなの！」

けれどやっぱり、目の前の日向は本物だし、抓った頬にも痛みを感じる

「てか、龍也も満更じゃないんだろう？

だって、ムスコがこんなに大きくなってるんだからなぁ・・・」

「？！！！／／／／」

顔が一瞬にして赤くなるのを感じた、

「俺に欲情してんだ・・・――」

日向は、先程より少し声のトーンを低くするとそのエロい声で俺の耳元で囁きだす

「おかしくなるくらい、お前を感じさせてやるよ。」

そう言うなり、俺の耳朶をピチャピチャとヤラシイ音を立て舐め始める日向

「・・・・ッ・・・・あァっ！！／／／／」

?!!!!!!

なんだよ今の声?!!

本当に俺の声か?!!

あんな女みてぇな声を俺が出したのか?!!!

とっさにでてきた自分の声に信じられなくなり俺は、唖然とする

「もっと俺の為に鳴けよ・・・・・・――」

何だよ日向のヤロウ!!／／

お前みたいな細っこい奴片手で振り解いてやるよっ!!

俺の右手が日向を突き放そうとした時

「おーっと逃げちゃ駄目だろ?」

「?!!／／／」

日向の手が俺の股へと侵入する

クソッ!!なんで振り解けねぇんだよ!力が入らなねぇ・・・・!

／／／

俺の体はまるで軟体動物にでもなったかのように、体に力が入らず日向にされたい放題弄ばれてる

日向に触れられる度に体が火照りビクンとのけぞり返る

俺だってそれなりには経験もあるし、テクだって誰にも負けない自身があった

なのに・・・・たった今俺は恥ずかしい格好をさせられ、感じている、しかも男にだ

屈辱と快感の波にさらわれもうおかしくなりそうだった

「俺の本気はこんなもんじゃねぇよ？」

そう言うと日向は俺のモノを銜えはじめた

「おまッ！！何するッ？！！／／／／／」

口いっぱいに俺を含むと、日向はニヤリと不気味な笑みを浮べる

「また、龍也のあの可愛い声聴きてぇなぁ・・・・・」

「ッ？！！！／／／／／」

先程の事を再び思い出し、顔が真っ赤になると同時に日向は舌で俺をじらしはじめた

チョロチョロと俺の先端を舐めるかと思うと、急に歯を立て甘噛みしたり

下から上へとゆっくりと俺のモノの味わっていく日向

流石にここまでくれば俺も限界を超していた

ヤバイ・・・・・出ちまう！！！！

それだけは、避けたかった、俺は必死で日向を突き放そうとする

「バカ日向もうヤメロッ！！！離せよッ・・・・！！！／／／／ッ」

俺が抵抗するたびに日向の口の動きが激しくなっていく

「また、あの声聴かせてくれるんなら離してやるよ・・・・・」

何処までも腹黒い日向は絶対無理だと分かっていながら俺に提案してくる

「それは、無理だッ・・・・／／／／良いから、はなッ・・・・・・・・・――？！！！！／／／／」

不意打ちだった。

俺が気を緩めた所で日向は最後の一撃を喰らわせやがった

大量の精子をペロリと平気な顔で飲み込み、母乳を求める乳児のように俺のモノにしゃぶりつく日向の姿

俺はその後何度イっただろうか・・・・・――??

ただ、日向のされるがままに身を任せ、ただ時間が過ぎていくのを呆然と待っていた

キーンコーン
　カーンコーン

屋上へ続く螺旋階段で力尽きた俺はぐったりしながら日向に付き添われ教室に戻ることになった

女教師姫野

その後の授業も耳に入らず
日向のあの声だけが俺の耳に残る
あんな奴とは思わなかった
絶望と微かな期待が入り交じりもう龍也の頭は真っ白だった
期待ってなんだよ
俺は何を望んでる！？？
思わず机に八つ当たりした
「後で日向に文句つけてやるッッ！！！！！！」
気づかないうちに声を張り上げ席を立っていた
教師や生徒はあっけにとられ、誰一人と龍也を止める者はいなかった
「どこだ日向の野郎職員室かッッ？？？！！！！！！」
ぜってー彼奴泣かせてや
そしてこの学校辞めてけば良いんだあの変態教師
ぜってー泣かせて

泣かせて……――

泣か……

パッと日向の泣き顔が俺の頭をよぎる

あの大きな目いっぱいに涙を浮かべて

泣きじゃくっりなんかたてちゃってさ

「やっぱ可愛いな日向は……――」

んっ……――？？？

俺は今何て言った？？？

日向が

日向が…

可愛いだとォ？？？！！！

これは夢だこんなの夢だごめんなさい（？）神様許して下さい

「俺日向に会ってからおかしくなっちまった……――」

廊下にうずくまるようにしゃがみこむと龍也は真っ赤にした顔を覆い隠す

んっ……？？？

保健室からは妙に明るい蛍光灯の光と、ドアの隙間から微かに漏れる話し声

その聞き覚えにある声を聞いて龍也はまさかと思いながら
そっとドアの隙間から中を覗いてみる

衝立によって誰かは分からないものの

この声絶対日向の声だ！！！

そして、日向と話している妙に色っぽい声は保健室のプリンセスと有名な姫野じゃねーか

なにしてるんだよ彼奴等！！！！

盗み聞きは趣味では無いがぴったりとドアに耳をつけ聞き耳をたてる

「もぅっ日向センセイったらおっちょこちょいなんだからぁっ☆」

「すいません姫野の先生」

オイ姫野の２０後半で☆はないだろ☆は！！！！」

それに日向ちょっと美人先生だからって鼻の下伸ばしやがって

「それにしてもォどぅしたんですかその頬の傷、これまたパックリ開いちゃって」

うっ……それは日向が俺をかばって眼鏡の破片で出来た傷…

「ハハちょっと眼鏡の破片でね」

「日向センセイ眼鏡かけない方が可愛いですよ」

っつつ！！！コラ姫野然り気無く日向を口説いてる（？）んじゃねぇよ！！！

「ハハハ姫野の先生は面白い、可愛いは、男性にとって誉め言葉では無いですよ??

それに眼鏡を外しては何も見えないですしね」

ハハハハざまーみろ姫野

あっさりながされてやーんのバーカバーカ

「何も見えない……ですか
あ、そうだ私、職員室まで付き添いましょうか??」
「本当ですか??凄く助かりますっ」

はァ??!
姫野のヤロー下心丸見えじゃねーか、気付けよ日向!!!お前は確実に狙われてるんだぞ??!!!
「ほら日向先生私の手につかまって」

……??!!
よせ日向その手に触んなっ!!!
「すみませ……ッ??!!」
突然途絶えた日向の声にベッドが軋む音
「日向せんせー本当可愛いは、私食べちゃいたくなる」
「止めてくださいッ姫野先生!!!なッ……!!」

???!!!!!
なにやってんだよ!!!!
とめなッ……――
「あンッァあ……―日向先生そこ…そこ……ぐちゃぐちゃにして

ええッ」

は？

青空

今姫野なんて言った……―??

そんな聞き間違えに決まってるまさか…まさか日向がな…

「日向せんせッ…そんなところ私イっちゃぅッっつ」

……嘘だ

嘘だ

こんなの

嘘に決まってる

悪い夢なら早く

早く

早く覚めてくれ

気付けば俺は走り出していた

教室に戻るわけでもなく行く先も考えずに
俺はただがむしゃらに走りに走る

ドアを開けるとそこは無限の空

俺はいつの間にか屋上に来ていたのだ

「すっげー綺麗」

いつもサボるたびに来ていた屋上だが
こんなに空を綺麗と思うのは、初めてだ

なんだか、俺の気持ちまで勇気づけてけれてるみたい
目を閉じて大きな空の下に寝転ぶ、周りには誰もいない、俺だけの空

「考えてみたら、日向と姫野が恋愛するのって普通だよな」

教師同士の結婚なんてよくある話だ

そうだよな

日向には普通の恋がお似合いだ
普通に結婚して、普通に子供産んで、普通の家庭をつくってくのが
一番お似合い

でも……――――

でも……――

でも…――

何故か心が痛む……――

あれ??

目から大量の雫石が俺の制服の上にこぼれ落ち、たくさんの染みになっていく

なんで泣いてんだよ俺

馬鹿みてぇ

胸が苦しいんだ……—

日向を見ていると

日向といると、俺が俺でなくなるみたいに、俺はどんどん余裕のないかっこ悪いやつになってしまう

こんなね辛すぎる…

ガチャッ！！！

「？？！！！」

日向かっ??!!

え

そこに立っていたのは日向なんかじゃなくて
にんまりとまんべんの笑みを浮かべた姫野の姿

「海堂君駄目じゃないサボりは」

ヤバい、このままだと俺は姫野の事殴ってもおかしくない

「海堂君もしかして泣いてた……――――??」

「……――」

図星をつかれてもぅ声もでない、本当は声を出したらいっきに涙も
溢れそうだからなのだけど

「かーぃぃ……」

「え」

「本当に海堂君健気で可愛いはっっ!!!!!!」

はぁ？？？！！！！

こいつ日向というものがありながら何だよ？？？！！！！

「お前ふざけんなよ、日向だけではヤリたりないってか」

「本当に喰べたいのは日向先生じゃない君の方だよ」

は？？

「貴方がこの学校に入学してから、私はずっと海堂君の事狙ってたんだから
声も顔も少し気が強いけど誰よりも寂しやがり屋さんなとこも全部サイッコー☆」

はぁあああ！！！！？？？

「やめろ！！！離せっ……」

くっッこいつ地味に力強い……！！！

女のわりには、男並みの力がある、てそんな事考えてる暇なんてねぇ！！！！

姫野は白衣からロープを出すと俺を縛りつけようとする

まぁ、いっかこーゆーの馴れてるし

自慢じゃないけど、俺に言い寄ってくる女くらい沢山いる、襲われるのなんて日常茶飯事だ

「抵抗しないって事は私に気があるってことカシラ？？」

イヤ、抵抗したら余計相手が喜ぶからだ、その程度の知識なら小５くらいで、もう体で体験してるっつーの

「うふ、燃えてきたワ」

え……？？

姫野は萎えるどころか、俺火に油を注いちまった

姫野は乱暴にシャツのボタンを引きちぎる

うわー盛ってんな

「ねぇ海堂君屋上で性教育の実績しようか」

はい、そんなのあるわけないでしょ、犯罪だから

「こんなかっこいい生徒とエッチできるなんて私は……ッ！！？？？」

「姫野先生安心して下さい、性教育なら俺がこの生徒にたーっぷりこれから俺が教えていくつもりです」

日向ッ！！！！！！

なんでお前がここに……――

我慢していた涙がいっきに頬をつたり大量の涙がボロボロと溢れていく

「では、姫野先生人体実験でも初めましょうか？？」

「ひぃいっ！！！」

あわてて姫野は屋上から立ち去る、そこに残された俺と日向

「泣くなよ」

「泣いてなんかいねぇよ馬鹿」

俺の気持ちは正直言って分からないが

日向とは辛いけどずっと一緒にいたい、苦しいけど離れたくない

矛盾だらけの俺の気持ちに気付くのは、もぅちょっと大人になってからかな

――――――――――――――――――

本当に何もしてないんだな？！

「だから姫野が龍也の存在
知ってて俺は押し倒されたまま
姫野に変な声だされてたの」

「嘘だったら針千本飲めよ」

え古ッ！幼稚園児レベル（笑

「分かっている飲むよ（笑」

あれ意外に素直じゃねーか／／

龍也

（（やっぱ　可愛い））

日向

→

ばかっぷる（笑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3039e/

俺だけのセンセイ

2010年10月28日03時27分発行